

本日は二十歳を迎えました私たちのために、このような盛大な式典を開催してくださいまして、誠にありがとうございます。

また、お祝いや激励のお言葉を頂きました、市長や、多数のご来賓の方々に、心より御礼申し上げます。

新型コロナウイルスが猛威を振るう中、当時思春期真っ只中の私たちは、多くの我慢を強いられ、多くの不安を抱えながら、日々を過ごしていました。

中学三年生の三学期、卒業を間近に迎え、残りの中学校生活を、素敵な仲間たちと大切に過ごそうと思っていた私は、突然の一斉休校と縮小された卒業式に戸惑い、心が追いつくよりも先に、宙ぶらりんのまま義務教育を終えてしまいました。

高校に進学しても、多くの規制にがんじがらめにされる日々が続きました。不安の声が反響し、目まぐるしく移り変わる社会に立たされ、ただ毎日を生きるのがやっとでした。

液晶越しに行われる授業の中で、漠然と、この先のことを考えていた私は、明るい未来を思うように想像することができないでいました。

しかし今はどうでしょう。みなさん、周りを見回してみてください。すぐ近くには友達がいて、仲間がいて、こうして二十歳の祝賀祭を縮小することなく迎えることができます。コロナウィルスの脅威が完全に去ったわけではありません。社会は常に移り変わります。疫病以外にも、地震などの天災や、若者にとって明るいとは決して言えない社会情勢。すべてを樂觀視して「明るい明日が待っている」なんて言えません。

しかしながら、こうして盛大に二十歳の祝賀祭を迎えられたことは、コロナ禍にいた当時の私たちから見れば、「明るい未来」の一つと言えるのではないでしょう。

現在、社会人として日々汗を流している人、自分の夢に向かって努力している人、明確な夢がなく、漠然とした将来の不安と共に過ごしている人。沢山の人がいると思います。

明日のことなんてわからないけれど、半年後、一年後、十年後、今日のことを思い出して、そのときに自分が「前に進んだな」と思える日がきつと訪れます。

沢山の緑に囲まれたこの多摩の土地から、私たちはそれぞれの飛躍を始めるのです。今日という日が、そんな足掛かりになればいいなと、私は思います。

最後になりましたが、二十歳の祝賀祭実行委員のメンバーや、二十歳の祝賀祭を開催するにあたって支えてくださった皆さま、今日まで私たちを育ててくれた家族、そばで見守りながら、沢山のことを教えてくださった先生方、そして伝統を守り、私たちの誇りである多摩の土地を守ってくださった地域の方々、心より感謝し、代表挨拶とさせていただきます。

令和七年一月十三日 二十歳の祝賀祭、実行委員代表 長松剛史。